





モデルの幼馴染彼女と濃密えっちする話

サークル名..裏森

作者..うらもり

目次

プロローグ：幼馴染で、恋人	5
第一章：蓮と光莉の濃密えっち	10
第二章：お風呂でも求め合う	エラー! ブックマークが定義されていません。
第三章：もっと欲しい.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
第四章：二人の夜はこれから	エラー! ブックマークが定義されていません。
第五章：再びの浴室、溺れ合う	エラー! ブックマークが定義されていません。
第六章：まだまだ終わらない	エラー! ブックマークが定義されていません。
第七章：知らない快楽.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
第八章：空っぽ、それでも二人は・・・	エラー! ブックマークが定義されていません。
エピローグ：翌朝、互いの体は跡だらけ.....	エラー! ブックマークが定義されていません。

プロローグ..幼馴染で、恋人

時刻は午後八時を回ったところだった。

都内の瀟洒なマンションの一室。リビングのソファで、神城光莉（かみしろひかり）は手元の台本に視線を落としていた。

明日の撮影のスケジュールと、ポージングの確認。現役大学生でありながらモデルとしても活動する彼女にとって、夜のリラックスタイムもまた、美を磨くための大切な時間だ。

ふと、玄関の方でカチャリと電子錠が解錠される音が響いた。

「ただいまあ……光莉い……」

ドアが開くと同時に聞こえてきたのは、大学で見せるリーダーシップに溢れた声とは似ても似つかない、甘えたような声音だった。

ドタドタと廊下を歩く足音が近づき、リビングのドアが開く。

そこに立っていたのは、幼馴染であり彼氏の――竹内蓮（たけうちれん）だ。

バスケット部の練習帰りだというのに、彼はすでに部室のシャワーで汗を流してきたらしく、ふわりと爽やかなシヤンプーの香りを漂わせている。

「おかえり、蓮。お疲れ様」

光莉が微笑んで振り返った瞬間、蓮の長い腕が伸びてきた。

彼は光莉の隣に座するというプロセスを飛ばし、そのままソファごと光莉を抱きしめるようにして、その体への

しかかってきた。

「んう……っ、ちよつと、蓮……重いつてば」

「やだ。……充電切れ。光莉補充しないと動けない」

蓮は光莉の首筋に顔を埋め、子供のようスリスリと頬を擦り付けてくる。

彼の引き締まったアスリートの体軀は、光莉にとって決して軽くはない。けれど、この重みと体温が、何よりも心地よいことを彼女自身が一番よく知っていた。

外では「頼れるキャプテン」、家では「甘えん坊な彼氏」。

このギャップを知っているのは、世界中で自分だけだという優越感が、光莉の心をくすぐる。

「はいはい、よしよし……。今日も頑張ったね」

光莉は台本をサイドテーブルに置き、蓮の少し湿った髪を優しく撫でた。

すると、蓮が顔を上げた。

至近距離で合う視線。さっきまでの甘えた瞳の奥に、ゆらりと暗く、熱い色が灯るのを光莉は見逃さなかった。

「……光莉」

「なあに……？」

「……キス、していい？」

許可なんて求めていないくせに。

蓮は返事を待たずに顔を寄せ、光莉の形の良い唇を塞いだ。

「ん……っ、……ちゅ……」

最初は、触れるだけの優しい口づけ。

お互いの唇の柔らかさを確かめ合うような、挨拶代わりのキス。

だが、蓮のスイッチが入るのに時間はかからなかった。彼はすぐに角度を変え、光莉の唇を甘噛みして、侵入の許可を求めた。

「んむ……っ、……あ……」

光莉がわずかに口を開くと、待っていましたとばかりに熱い舌が滑り込んでくる。

「れろ……っ、……じゅる……、……ん……っ」

「んっ……ふ、……あ、……れん……っ」

静かなりビングに、水音が響き始める。

蓮の舌は、光莉の口内を執拗に探索し、彼女の舌に絡みつき、吸い上げた。

甘えん坊な彼氏の仮面が剥がれ落ち、貪欲な雄の本能が顔を覗かせる。

「じゅるる……っ、……ちゅぽ……、……んむう……」

「は、……んっ、……あ、……んう……っ」

光莉の背中がゾクゾクと震える。

まだ心の準備も、体の準備もできていないのに、彼に唇を奪われるだけで、思考が甘く溶かされていく。

蓮は光莉の後頭部を大きな手で支え、逃げ場を塞ぐと、さらに深く、喉の奥まで犯すような濃厚なキスを繰り返した。

「ぷは……っ、……ん、……じゅる……っ、……ちゅ……」

「はあ、……はあ、……っ、蓮、……ちよつと、待つ……」

一度唇が離れ、銀色の糸が二人の間に細く伸びる。

光莉は荒い息をつきながら、とろんと潤んだ瞳で蓮を見つめた。

このまま流されてはいけない。同棲生活には、守るべき生活のリズムがあるのだから。

「ご飯、まだでしょ……？ 温めるから……それに、私まだお風呂も……」

「……あとで」

蓮は短く遮ると、獲物を逃さない捕食者の目で光莉を見つめた。

「ご飯も風呂も、あと。……今は、光莉が食べたい」

「え、……でも、……んっ!？」

反論は、再び重ねられた唇によつて封じられた。

今度は先ほどよりも激しく、強引に。

「んぐ、……じゅぽ……っ、……じゅるるう……っ!!」

「んーっ!……ふ、……あ……っ!」

蓮の手が、光莉の部屋着の裾から入り込み、滑らかな素肌を撫で上げる。

熱い掌がくびれを愛撫し、さらに上へと這い上がっていく感触に、光莉の抵抗心は砂の城のように崩れ去った。

結局、自分は彼に甘いのだ。

ダメだと思いつつも、求められる喜びに抗えない。

「……ん、……はあ、……もう、蓮ったら……」

光莉は観念したように吐息を漏らすと、蓮の首に腕を回し、その背中にしがみついた。

それが、同意の合図だった。

蓮は満足そうに喉を鳴らすと、光莉を軽々と抱き上げた。

「……好きだよ、光莉」

「……ん。私も……」

二人は絡み合ったまま、リビングを後にする。
寝室のドアが閉まる音が、これから始まる長い夜の合図となった。

第一章..蓮と光莉の濃密えっち

寝室のドアが閉まると同時に、世界は二人だけの甘い密室へと変貌した。

間接照明だけが灯る薄暗い部屋。ダブルベッドのスプリングが、二人の重みを受け止めて小さく軋む。蓮は光莉をシーツの上に押し倒すと、覆いかぶさるようにしてその瞳を覗き込んだ。

「……光莉」

「ん……、蓮……」

名前を呼び合うだけで、互いの体温が上昇していくのがわかる。

蓮は光莉の顔を両手で包み込み、再び唇を重ねた。

「ん……、ちゅ……、……れろ……っ」

「んむ……、じゅる……、……あ……っ」

帰ってきた時の荒々しさとは少し違う、慈しむような、けれど深い粘着質を持った口づけ。

舌先で光莉の唇をなぞり、歯列を割り、口内の粘膜を舐め上げる。

唾液が混ざり合う湿った音が、静かな寝室に反響する。

「じゅるう……、ちゅぱ……、……ん……っ」

「はあ……、んっ、……蓮の、におい……」

光莉が陶酔したように呟くと、蓮は満足そうに目を細め、舌を彼女の顎から首筋へと滑らせた。

「ん、……あ……、そこ……」

敏感な首筋に熱い呼気が吹きかけられ、濡れた舌が這う。

蓮は光莉の反応を楽しみながら、彼女が着ていたルームウェアの裾に手を掛けた。

抵抗などあるはずもない。光莉は素直に両腕を上げ、衣服が脱がされるがままになった。

露わになったのは、モデルとして完璧に管理された白磁の肌と、繊細なレースに包まれた豊かな双丘だった。Eカップの重量感が、重力に従って柔らかく形を変え、谷間を作っている。

「……綺麗だ。光莉」

「ん……、恥ずかしいから、あんまり見ないで……」

「見るよ。俺だけのものなんだから」

蓮は独占欲を滲ませてそう囁くと、鎖骨の窪みにキスを落とした。

そこからゆつくりと、焦らすように下へと舌を這わせていく。

ふくらみの斜面を舐め上げ、ブラジャーのホックを片手で器用に外した。

パチン、と軽い音がして、布地が緩む。

蓮がレースを剥ぎ取ると、薄ピンク色の先端が、恥ずかしそうに空気に晒された。

「あ……、蓮……」

「ここ、もう硬くなってる」

蓮は容赦なく指摘し、その先端を「ぱくり」と口に含んだ。

「ひ……っ!？」

「じゅる……、ちゅぱ……、……れろ……っ」

「あ、……んっ、……音、……だめえ……っ」

舌の腹で転がし、吸い上げ、時折歯を立てて甘噛みする。

蓮は幼馴染として、そして恋人として、光莉の胸がどこより敏感であることを熟知していた。

光莉のスイッチを入れるには、ここを徹底的に攻めるのが一番の近道だ。

「じゅるる……、んむ……、……ちゅぷ……っ」

「あ、……んう……っ、そこ、……強く吸っちゃ……あぁっ！」

蓮は右の胸を吸いながら、左の胸を掌で大きく揉みしだいた。

指の隙間から溢れるほどの柔らかさ。餅のように吸い付く肌の質感。

モデルとしての節制で引き締まったウエストとは対照的な、暴力的なまでの豊満さ。

そのコントラストが、蓮の情欲をさらに煽る。

「はぁ……、光莉、すごい柔らかい……」

「んっ、……蓮……っ、もう、……胸ばっかり……っ」

「だって、好きなんだもん。……光莉も、気持ちいいでしょ？」

「う、……うん……っ、気持ちいい、けど……っ」

光莉の呼吸が乱れ、腰がシーツの上でもぞもぞと動き始める。

そろそろ、次の段階だ。

蓮は胸への愛撫を続けながら、空いた右手をゆつくりと下へ滑らせた。

滑らかな腹部を通り、ショーツのゴムに指をかける。

「んっ！？……まだ、早……」

「早くないよ。……ほら、もうこんなに湿ってる」

蓮はショーツ越しに、光莉の秘部を指の腹で割るように撫でた。

布地越しでも伝わってくる熱と湿り気。

光莉は「あっ」と声を上げ、太ももを閉じようとするが、蓮の体軀がそれを許さない。

蓮は邪魔な布切れを引きずり下ろした。

秘部はすでに愛液で濡れ、淡い光を反射している。

蓮は再び光莉の乳首に吸い付きながら、中指をゆつくりと、その濡れた裂け目へと沈めた。

「ん……む……っ！……あ、……入っ……た……」

「じゅる……、ちゅぱ……っ」

「あ、……あ……っ、蓮の指、……熱い……っ」

胸への執拗な口撃と、下半身への侵入。

上下からの同時刺激に、光莉の思考は白く染まっていく。

蓮の指は、焦らすように浅いところを掻き回し、やがて狙いを定めて奥のスポットを擦り上げた。

「あ、……っ！そこ、……っ！ん、……んうっ！」

「ここ、好きでしょ？……光莉、中すごい締まってる」

「だめ、……そんなに、……動かされたら……っ！」

「ぬふ……、ぐちゅ……、……ちゅふ……」

指が出入りするたび、卑猥な水音が寝室に響き渡る。

蓮はさらに親指でクリトリスを弾き、中の指を激しく湾曲させた。

「あ、……あ、……ああっ！蓮、……だめ、……っ！くる、……きちやう……っ！」

「いいよ、いつて。……俺の手で、いつて」

「あ、……あ、……ああああーっ！」

光莉の体が弓なりに反り、蓮の腕にしがみつく。

ガクガクと太ももが痙攣し、秘部が蓮の指を強く締め付けた。

一度目の絶頂。

蓮は余韻に浸る光莉の額にキスをし、優しく髪を撫でた。

「……はあ、……はあ、……もう……蓮の、いじわる……」

「ふふ。ごめんね。……可愛かったよ」

光莉は潤んだ瞳で蓮を睨むが、そこには怒気など微塵もなく、蕩けたような情愛だけが浮かんでいた。そして、彼女の瞳に、ある決意の色が宿る。

「……やり逃げなんて、させないから」

光莉は身を起こすと、今度は自分が蓮を押し倒すようにして、その上に跨った。形勢逆転。

乱れた髪を耳にかけ、妖艶に微笑むその姿は、先ほどまでの「甘やかされるお姉さん」ではなく、男を惑わす「魔性の女」そのものだった。

「……光莉？」

「今度は、蓮の番。……覚悟してね？」

光莉は蓮のTシャツを捲り上げ、鍛え上げられた腹筋に唇を這わせた。

舌先で臍の周りをなぞり、筋肉の溝を舐め上げる。

「っ、……くすぐったいって……」

「嘘。……ここ、敏感なの知ってるもん」

幼い頃から一緒にいて、高校から付き合っている二人だ。

蓮がどこをどうされると弱いのか、光莉はすべて把握している。

彼女は蓮の反応を楽しみながら、ズボンの上から、すでに硬さを主張している膨らみを掌で包み込んだ。

「……ん。……すごい。もうこんなになってる」

「……誰のせいだと……」

「ふふ。……素直でよろしい」

光莉はスウェットパンツと下着をまとめて引き下げた。

弾け飛ぶようにして、蓮の剛直が空気に晒される。

先端からはすでに我慢汁が滲み、血管を浮き上がらせて脈打っていた。

光莉はその根本を優しく握り、まずはゆっくりと上下に擦り上げた。

そして、亀頭に顔を寄せ、「ふうー」と熱い息を吹きかける。

「ひ、……っ！」

「びくってした。……可愛い」

光莉は先端を舌尖でペロリと舐めた。

そこからは、モデルとしてのプライドなどかなぐり捨てた、愛する男への奉仕の時間だった。

「じゅる……、ちゅ……、……れろ……っ」

「あ、……光莉、……舌、……っ」

裏筋を舐め上げ、鈴口を吸い、玉袋を掌で転がす。

慣れた手つきと、愛のこもった舌使い。

蓮は枕を握りしめ、快感に耐えるように天井を仰いだ。

そんな蓮の様子を見て、光莉はさらに加虐心を刺激されたのか、奉仕のギアを一段階上げた。

「んむ……、じゅぽ……、……じゅるるう……っ」

「ぐ、……う……っ！深っ、……！」

喉の奥までくわえ込み、頬をこけさせて強く吸い上げる。
バキュームのような吸引力。

光莉の口内は温かく、そしてとろとろに濡れている。

舌が螺旋を描くように絡みつき、蓮の理性を削り取っていく。

「じゅるっ、……んぐ、……ちゅぱ……っ！……じゅるるるう……っ！」

「あ、……っ、あぁっ！光莉、……すごい、……っ！」

蓮の腰が浮く。

余裕だった表情は消え失せ、今はただ快楽に翻弄される一匹の雄になっていた。

光莉は蓮の限界が近いことを悟ると、一度口を離れた。

銀色の糸を引きながら、上目遣いで蓮を見つめる。

その表情は、慈愛に満ちた聖母のようであり、男の精をすすするサキュバスのようでもあった。

「……蓮。苦しそう」

彼女は濡れた指先で、蓮の張り詰めた先端をツンと突いた。

「……一回、出しとく？本番の前に」

その言葉は、提案というよりは、有無を言わせぬ誘惑だった。

蓮は一瞬、迷いを見せた。

ここを出してしまったら、本番で持つのだろうか。いや、しかし、今のこの快感の波には逆らえない――。

「……だ、出す……っ！出したい……っ！」

「ふふ。……いいよ。全部ちょうだい」

光莉は嬉しそうに微笑むと、再び蓮の熱を口いっぱい頬張った。

今度は、明確に「射精させる」ための、激しく、容赦のないストロークだ。

「んっ、……んぐ、……じゅぽ、……じゅるるるるう……っ!!」

「あ、……あ、……くる、……っ！ 光莉、……いく、……っ!!」

喉の奥で亀頭を締め付け、舌で激しく刺激する。

蓮の腰が大きく跳ね上がった。

「う、……ああああーっ!!」

ドクッ、ドクッ、と脈打ち、蓮の欲望が光莉の口内へと放たれた。

光莉は喉を鳴らし、その全てを受け止める。

精液の生暖かい感触と、独特の味。

それさえも、彼女にとっては愛する人の一部だった。

「ん、……んぐ、……ごくん……っ」

最後の一滴まで飲み干し、光莉は口元を拭って微笑んだ。

「ん……ごちそうさま。……濃かったね、蓮」

「はあ、……はあ、……っ、光莉、……飲んだの……？」

「うん。……蓮の、だもん」

そう言いながら、光莉はまだピクピクと痙攣している蓮のモノを、丁寧に舐めて掃除し始めた。
いわゆる「お掃除フェラ」。

だが、それは単なる掃除では終わらなかった。

「ちゅ、……れろ……。……あれ？ まだ元気だね」

「ちょ、……光莉、……っ」

「ふふ。……まだ、終わりじゃないよ？」

優しく、ねっとり舐め上げられるうちに、一度吐き出したはずの蓮の息子は、再び血液を集めて鎌首をもたげ始めた。

若い回復力と、何より目の前の恋人のテクニックが、彼を休ませてくれない。

「……よし。復活」

カチカチに戻ったそれを満足そうに確認すると、光莉は蓮にキスをした。

「……次は、ちゃんと入れて？……私の奥、蓮でいっぱいにして」

その一言で、蓮の中のスイッチが完全に切り替わった。

彼は上体を起こし、光莉を押し倒して仰向けに寝かせた。

二人は一糸まとわぬ姿で、ベッドの上で重なり合う。

「……愛してる、光莉」

「……ん、……私も……っ」

蓮は光莉の両脚を割り、自分の腰を沈めた。

濡れそぼった光莉の秘部が、蓮の先端を吸い込むように受け入れる。

「あ……っ、……入る、……っ！」

「く、……っ、光莉、……あったかい……っ」

「ズブッ……、ヌプッ……、……インッ……！」

一気に根元まで。

二人の体が一つに繋がる瞬間、部屋の空気がさらに熱を帯びる。

愛おしさを確かめ合うような、深い正常位。

蓮は光莉の顔を覗き込み、唇を重ねながら腰を動かし始めた。

「ん……、ちゅ……、……あ……っ」

「光莉、……気持ちいい？」

「うん、……っ、蓮の、……すごい、……奥に……っ」

激しく突くのではない。

互いの内壁のひだを味わい、密着感を楽しみ、愛を囁き合いながらのセックス。

蓮が動いたたびに、光莉の豊かな胸がフルフルと揺れ、二人の肌が打ち合う音が「パン、パン」と湿ったリズムを刻む。

「あ、……あ、……っ、蓮、……キス、して……っ」

「ん、……ちゅ、……れろ……っ」

舌を絡め合い、唾液を交換し、下半身では愛液と先走りを混ぜ合わせる。

体も心も溶け合うような感覚。

たつぷりと時間をかけ、何度も体位を微調整し、互いのいいところを擦り合わせる。

やがて、二度目の限界が蓮に訪れた。

「……光莉、……もう、だめだ……っ」

「ん、……いいよ、……出して……っ、蓮の全部、……中に……っ！」

光莉が脚を蓮の腰に絡め、背中に爪を立ててしがみつく。

その締め付けが、最後の一押しとなった。

「あ、……っ、いく、……っ！ 光莉、……っ……！」

「あ、……ああっ！……熱い、……っ！きてる、……っ！」

蓮は腰を最奥まで押し込み、光莉の子宮口に先端を押し付けた。

ドクッ、ドクッ、ドクドクッ……！！

先ほど出したばかりとは思えないほどの量が、光莉の胎内へと勢いよく放出される。

光莉はその熱を全身で感じ、ビクビクと膣壁を収縮させて応えた。

「はあ、……あ、……っ、すごい、……いっぱい……っ」

「……はあ、……光莉……っ」

放出の余韻が去るまで、二人は強く抱き合ったまま動かなかった。

心臓の鼓動が、一つに重なって聞こえる。

やがて蓮がゆつくりと腰を引くと、結合部から白濁混じりの愛液がとろりと溢れ出し、シーツを汚した。

その光景さえも、愛おしく感じる。

「……ん、……ちゅ……」

蓮は光莉の汗ばんだ額にキスをした。

「……気持ちよかった。ありがとう、光莉」

「んー……。私も、幸せだったよ」

光莉はとろんとした瞳で微笑み、蓮の首に腕を回したまま、甘えるように身を寄せた。

しばらくの間、二人は言葉もなく、互いの体温を感じながらまどろんでいた。

少しして、呼吸が整ってきた頃、光莉が蓮の耳元で囁いた。

「……ねえ、蓮」

「ん？」

「お風呂、沸いてるよ。……一緒に入る？」

その言葉に、蓮は嬉しそうに破顔した。

「うん。……洗ってくれる？」

「ふふ。……甘えん坊さん」

光莉はクスクスと笑い、蓮の手を引いてベッドから降りた。

汗と体液に塗れた二人の体は、浴室の灯りの下で、さらに艶めかしく輝くことだろう。春の夜の情事は、まだまだ終わりそうになかった。